

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360056

研究課題名(和文) テレビアニメデータベースを用いたナショナリズムのジェンダー化に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Study on Genderization of Nationalism by Using TV Animation Data Base

研究代表者

増田 のぞみ (MASUDA, Nozomi)

甲南女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80449553

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、1963年から2010年までに日本で放映されたテレビアニメ作品のデータベースをもとに、テレビアニメに描かれるナショナルイメージの傾向を明らかにすることである。今回は作品の舞台となった国の分布や主人公の外見の人種的な特徴について、「少女向け」「少年向け」「大人向け」という3つのカテゴリごとに比較・分析した。その結果、「少年向け」アニメや男性キャラクターが日本を舞台に黒髪で描かれ、日本というナショナルイメージを背負ってきたのに対して、「少女向け」アニメや女性キャラクターは、人種を基盤とするようなナショナルイメージには縛られず、多様なナショナルイメージを引き受けていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to elucidate the tendencies of the national images described by TV animation films based on the database of TV animation works that were broadcasted in Japan during the period from 1963 to 2010. This time, the countries those works are set in, and the racial features of the aesthetics of the main characters were compared and analyzed by three categories of works "for young girls", "for young boys" and "for adults". As a result, while the animation works "for boys" were set in Japan and male characters were dark-haired, representing the national image of Japan, the animations works "for girls" and female characters were not bound by a racially-based national image, and representing diversified national images.

研究分野：総合人文社会、メディア文化論、ポピュラー文化研究

キーワード：テレビアニメ ジェンダー ナショナルイメージ マンガ 少女向け 少年向け

1. 研究開始当初の背景

近年、ポピュラーカルチャーにおけるナショナリズム研究が行われ、その蓄積が進んでいる。しかし、それらの先行研究においてはジェンダーの視点が希薄であったと考えられる。しばしば指摘されるように、ナショナリズム的な傾向については男女差が見られるため、ジェンダーごとにナショナリズムとの関係を考察する必要がある。若年男性向けの文化は、戦前・戦中にみられる「少年の理想主義」、戦後男の子文化とミリタリーカルチャーとの関連、現代のネット文化におけるナショナルスティックな言説や若者の「右傾化」など、戦前・戦後を通じてナショナルなものとの結びつきを強く持っていると言われる(伊藤2004, 北田2005, 小谷ほか2011)。一方、戦前の少女文化とナショナルイメージの結びつきについての研究はいくつか行われているが(ロバートソン2000, 今田2007ほか)、戦後の少女向けポピュラー文化とナショナルイメージについて論じた研究は少なく、これまでほとんど語られてこなかったと言える。

また、様々な形で自国や他国のイメージが描かれるテレビアニメでは、しばしばナショナリズムが表現されることが指摘されている(佐野2009)。テレビアニメは、戦後のポピュラー文化を代表するテレビというメディアのなかでも幼少期や若年層の視聴者が多く触れるものであるため、若年層のナショナリズム的傾向の背景にある「日本」や「外国」といったイメージの形成に大きな影響を与えてきたと考えられる。こうした問題意識から、我々はナショナリズムのジェンダー化に関する研究の一環として、ジェンダー的な視点を取り込んだテレビアニメデータベースの作成と、その分析を進めてきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1963年から2010年までに日本で放映された全てのテレビアニメ作品のデータベースを作成し、そのデータベースをもとにテレビアニメに描かれるナショナルイメージの傾向を明らかにすることである。今回は、戦後のテレビアニメの舞台となった国の分布や主人公の外見の人種的な特徴について、「少女向け」「少年向け」「大人向け」という3つのカテゴリごとに比較・分析を行った。これらの作業を通して、戦後日本におけるジェンダー化されたナショナルイメージの様相を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

まずテレビアニメをリスト化するにあたって、1988年までは『テレビアニメ25年史』(アニメージュ編集部, 1988)に掲載された

すべての作品、1989年以降はアニメ雑誌『アニメージュ』(徳間書店)に掲載される「年間パーフェクトデータ」に載っているすべての作品を対象とした。リストに入力した項目は、放映の概要、原作の媒体、主人公の設定、物語の舞台設定などである。集計タイトル数は5273件であり、うち重複タイトルを除くと3285件となっている。本研究グループが作成したテレビアニメリストの概要と原作媒体に注目した論考はすでに発表済である(増田・東・猪俣・谷本・山中, 2013)。

今回の研究では、戦後日本におけるジェンダー化されたナショナルイメージの様相を明らかにすることを目的とするため、本データのうち、主人公の性別、髪の色、作品の舞台に関する項目を利用し、その傾向を分析することとした。

4. 研究成果

研究成果の概要については、「テレビアニメデータベースにみるジェンダー化されたナショナルイメージ」というタイトルで投稿論文としてまとめた(増田のぞみ・東園子・山中千恵・谷本奈穂・猪俣紀子, 中部人間学会『人間学研究』第15号, 2017年3月)。

分析結果は、以下の通りである。

(1) データの全体像

まず、データの全体像として、主人公の性別、髪の色、作品の舞台についての概要を確認する。

テレビアニメ全体では、主人公の性別は女性23.6%、男性59.7%であった。日本で放映されたテレビアニメにおいては、男性主人公が約6割を占めており、女性主人公のおよそ2.5倍となっていることがわかる。

主人公の髪の色は、黒髪の主人公が24.1%で最も多く、次いで茶色の髪の主人公が18.7%であった。「アニメ色」とは、緑・青・紫・ピンクなど染髪しない限り髪の色としてはありえない、アニメ表現に特徴的な髪色を指す。アニメ色の髪で描かれた主人公は14.6%と茶色の髪に次いで多く、テレビアニメのキャラクター表現において定着していることがわかった。

作品の舞台としては、「日本」を舞台とした作品が50.6%と約半数を占めており、「日本」以外の国すべてを合わせた「外国」は7.6%であった。「その他」は、架空の世界や宇宙など、特定の国以外の場所が舞台となる作品を指しており、その割合は28.8%となった。

(2) ジャンルごとの傾向

ジャンルごとの作品数の割合は、「少女向け」が11.1%、「少年向け」は29.8%、「大人向け」が21.3%となった。日本で放映されたテレビアニメにおいては、「少年向け」作品が最も多く、全体の約3割を占めている。

その一方で、「少女向け」作品は「少年向け」作品のおよそ3分の1にとどまることが確認できた。

主人公の性別については、「少女向け」では女性が84.8%で男性が11.3%、「少年向け」では男性が93.1%で女性が6.0%、「大人向け」では男性が57.4%で女性が33.5%となっている。

もともと、雑誌媒体に原作をもたないアニメオリジナル作品などの分類において、主人公の性別が条件に含まれていることから、「少女向け」に女性主人公が多く、「少年向け」に男性主人公が多いのは当然ではある。しかし、テレビアニメにおいては、マンガを原作とする作品が35%と最も多く、アニメオリジナル作品は全体の30%であることを考えると（増田・東・猪俣・谷本・山中，2013）、「少年向け」作品においては突出して男性主人公が多く、「少年向け」と比較すると「少女向け」作品のほうが異性の主人公（男性主人公）が多いことが分かる。

ジャンルごとの主人公の髪の色については、「少女向け」作品では、茶色の髪が28.9%で最も多く、次いで赤・オレンジ・黄色が24.5%で、黒髪は14.6%となっている。「少年向け」では、黒髪が36.2%で最も多く、次いで茶色が21.9%である。「少女向け」と「少年向け」を比較すると、「少女向け」は茶色の髪がより多く、「少年向け」は黒髪の割合が高くなっている。

ジャンルごとの作品の舞台については、「少女向け」「少年向け」「大人向け」、いずれも「日本」を舞台にした作品が最も多く、約6割を占める。異なるのは、「少女向け」作品においては「少年向け」と比較すると宇宙や架空の世界などの「その他」となる作品が19.9%と相対的に少なく、「外国」が13.7%と「少年向け」よりも多くなっている点である。一方、「少年向け」作品では「外国」が6.1%と少なく、「その他」が32.2%となっている。

以上のように、ジャンルごとの傾向を分析したところ、「少女向け」作品では茶色の髪の主人公が多く、「少年向け」作品では黒髪の主人公が多いという傾向が見られた。

(3) ジャンルごとの主人公の性別と髪の色

続いて、主人公の性別ではなく、ジャンルによって主人公の髪の色が決定されるのかどうかを確認するため、主人公の性別と髪の色との関係を分析した。

まず、「少女向け」作品における女性主人公は、茶色の髪が33.5%と最も多く、アニメ色が19.6%、黒髪が14.5%となっており、男性主人公では黒髪が19.7%で最も多く、アニメ色が13.6%、茶色の髪が4.5%である。一方、「少年向け」作品における女性主人公は、アニメ色が41.5%と最も多く、次いで茶色の22.3%、黒髪は18.1%となっている。この「少年向け」作品に登場する女性主人公

の髪はアニメ色が41.5%を占めるという数字には驚かされる。それに対して、「少年向け」作品における男性主人公は、黒髪が37.7%で最も多く、茶色の髪が22.1%、アニメ色は14.2%である。「大人向け」作品における女性主人公は、茶色の髪が31.8%、アニメ色が26.3%、黒髪は18.3%である。「大人向け」作品の男性主人公では、黒髪が39.8%、茶色の髪が23.4%、アニメ色は15.2%となっている。

このように、「少女向け」作品も「少年向け」作品も、ともに男性主人公は黒髪の割合が高く、女性主人公は茶色およびアニメ色の髪の割合が高いことがわかる。もちろん、「少年向け」作品の男性キャラクターの黒髪の割合は突出して高く、「少女向け」作品では茶色の髪の割合がより高くなっていることから、ジャンルによる髪の色分けの特徴も確認できるが、それだけではなく、主人公の性別による髪の色の変化も確認することができた。このことは、髪の色の違いが「少女向け」「少年向け」といったジャンルの特徴を示すものであると同時に、ジャンルを問わずテレビアニメのキャラクターの描き分けにおける表現の特徴でもあることを示している。

ただし、髪の色は身体の人種的な特徴の一つであり、テレビアニメの舞台となっている場所の影響を強く受けている可能性も否定できない。そこで、作品の舞台となった場所で最も多かった「日本」が舞台の作品に限定して、主人公の髪の色の特徴を確認した。

日本を舞台にした「少女向け」作品においては、女性主人公の34.8%が茶色の髪で描かれ、男性主人公の34.3%が黒髪で描かれており、やはりそれぞれ最も高い割合を占めた。「少年向け」作品においても、女性主人公はアニメ色が39.7%、男性主人公は黒髪が47.3%となっており、作品の舞台を限定しない場合と同様の傾向が認められた。「大人向け」作品では、女性主人公の髪色は茶色が37.3%、男性主人公は黒髪が39.8%で、それぞれ最も多くなっている。

このように、日本が舞台であるにもかかわらず、やはり女性キャラクターは茶色やアニメ色など黒以外の髪色で描かれることが多いのに対して、男性キャラクターは、一貫して黒髪で描かれる傾向があることが確認できた。また、日本を舞台にした作品においても「少女向け」作品のほうが「少年向け」作品よりも茶色の髪が多く、「少女向け」作品に茶色の髪が多いのは外国が舞台となる作品が多いことだけが理由ではないことが確認できた。

したがって、どのジャンルにおいても、また舞台となる地域を日本に限定しても、男性キャラクターは黒髪、女性キャラクターは黒以外の髪色に描かれる傾向があることが明らかとなった。

(4) 考察

このように、テレビアニメにおけるキャラクターの髪の色表現は、男性キャラクターと女性キャラクターとでは異なるルールによって描き分けられている。ジャンル別にみても、作品の舞台となる国を考慮しても、男性キャラクターは日本人を想起させる黒髪で描かれ、女性キャラクターは黒以外の髪色で描かれることが分かった。つまり、日本のテレビアニメにおいては、男性キャラクターは日本人をイメージさせる人物として描き続けられ、女性キャラクターは日本人以外の人種をイメージさせる人物として表象されてきたと言える。とくに、日本のテレビアニメの中で最も作品数が多い「少年向け」作品において、主人公となる女性キャラクターの髪が41.6%も、日本人の髪色としては一般的ではないアニメ色で描かれているという点は見逃せないだろう。

テレビアニメの世界の中で日本の男性が「中心」におかれてきたことを勘案すれば、「少女向け」作品にしる、女性キャラクターにしる、これらを「女性」というジェンダーカテゴリとして捉えた場合、この「女性」カテゴリ(表象としての女性、視聴者としての女性)は、常に「残余」カテゴリを担ってきたと考えられる。日本の男性が常時、日本というナショナルイメージを背負い続けてきたのに対し、女性はナショナルイメージの中心的な担い手にはならなかったといえる。

しかし、「少年向け」アニメや、男性キャラクターが、およそ50年にわたって日本を舞台に黒髪で描き続けられてきたことは、典型的な日本・日本人以外に対する想像力が遮られてきたのだとも言える。裏を返せば、「少女向け」アニメや、女性キャラクターは、ナショナルイメージが固定されず、より多様な姿で描かれてきたことを意味する。他者化された多様なナショナルイメージを引き受けてきたということは、むしろ人種を基盤とするようなナショナリズムに縛られずに済んでいるということでもあり、多様なアイデンティティに同一化する経験を得ているのではないかとも考えられる。そこに従来のナショナリズムを支えてきた想像力とは異なる想像力のあり方を見出すこともできるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

増田のぞみ・東園子・山中千恵・谷本奈穂・猪俣紀子、「テレビアニメデータベースにみるジェンダー化されたナショナルイメージ」、『人間学研究』、第15号、中

部人間学会、2017年3月、査読有

増田のぞみ・猪俣紀子、「少女マンガ雑誌における「外国」イメージ 1960～1970年代の『週刊少女フレンド』分析より」、『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』、第53号、甲南女子大学、2017年3月、査読無

増田のぞみ・猪俣紀子、「少女マンガ雑誌における「外国」イメージ 1960～1970年代の『週刊マーガレット』分析より」、『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』第52号、pp.41-50、甲南女子大学、2016年3月、査読無

谷本奈穂、「『ポピュラーカルチャーと戦争の70年』シンポジウムによせて 内容分析の可能性」、『マス・コミュニケーション研究』、第88号、pp.3-15、日本マス・コミュニケーション学会、2016年2月、査読有

〔学会発表〕(計10件)

AZUMA Sonoko, "The Men of Her Dreams" in Japanese Popular Culture: Voices of Taiwanese Female Audiences of the Takarazuka Revue, *Crossroads in Cultural Studies* 2016, 2016. 12. 15., Sydney (Australia)

増田のぞみ、「テレビアニメにおける少年マンガ・少女マンガ原作作品の分析」、中部人間学会第16回大会、仁愛大学、2016年11月

増田のぞみ、「少女マンガを原作としたテレビアニメ作品の分析」、日本マス・コミュニケーション学会 2016年度秋季研究発表会、帝京大学、2016年10月

東園子、「日本の女性向けポピュラーカルチャーとしての宝塚歌劇の特徴 台湾の観客の視点から」、日本社会学会、九州大学、2016年10月

MASUDA Nozomi, "What Girls Want - The World of Shōjo Manga (Girls' Comics)", The Japan Foundation, London, Foyles (London), 2015年12月

増田のぞみ、「日本におけるテレビアニメ放映データの分析 「少女向け」「少年向け」「大人向け」作品の比較より」、中部人間学会第15回大会、仁愛大学、2015年11月

東園子、「未来は誰のものか 日本のテレビアニメを事例に」(「社会の芸術フォーラムシンポジウム 01 : 過去の未来 / 未来の過去 アニメ・まんがの 50 年史」)、東京大学、2015 年 8 月

猪俣紀子、「1970 年前後の日仏少女雑誌の比較」第 9 回日仏女性学会会員研究発表大会、日仏会館、2015 年 7 月

増田のぞみ、「マンガとテレビアニメの関係についての一考察----テレビアニメにおける原作媒体の割合の変遷」、日本社会学会大会、神戸大学、2014 年 11 月

増田のぞみ・猪俣紀子、「1970 年前後の少女マンガにおける「西洋」表象」、日本マス・コミュニケーション学会秋季研究発表会、東洋大学、2014 年 11 月

〔図書〕(計 1 件)

MASUDA Nozomi, "Magazine Media and Shoyo Manga: What is the Power of Shoyo Manga?", In Toku, Masami (eds.) *International Perspectives on Shoyo and Shoyo Manga: The Influence of Girl Culture*, Routledge, 2015 年 6 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増田 のぞみ (MASUDA NOZOMI)
甲南女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80449553

(2) 研究分担者

東 園子 (AZUMA SONOKO)
大阪大学・人間科学研究科・招へい研究員
研究者番号：40581301

猪俣 紀子 (INOMATA NORIKO)
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：20734487

谷本 奈穂 (TANIMOTO NAHO)
関西大学・総合情報学部・教授
研究者番号：90351494

山中 千恵 (YAMANAKA CHIE)
仁愛大学・人間学部・准教授
研究者番号：9039777